

# 吃音者グループが初の国際研究大会

## 8月8日から京都で

をつくっている。

吃音に悩む人は多い。人口の約一％と推定され、この割合はどの国でも同じ、といわれている。二年前に「各国では吃音が約一％と推定され、この割合はどの国でも同じ、といわれている。」

治療がなされているのかを話し合う場を持ちたい」との声が出て、この大会となった。ヨーロッパにある吃音者グループの連絡網などを通して参加を呼びかけた。

大会は八月八日から四日間、

## 対症療法など解決法を探る

大会での柱となるシンポジウムは三つ。まず、幼児期にどうり始めるケースが多いため、まわりの大人、とくに母親がどうかかわればいいのか。次いで、吃音問題の解決法として、吃音を治そうとする対症療法がいいのか、言友会のように吃音を持ったままより積極的に生きようとする自助グループづくりがどうか。参加を予定している各国の吃音者、臨床家のはほとんどは、対症療法の道をきくっているそうだ。

三つ目は、吃音評価の問題。どのくらいどもるかを発語のレベルでみるか、それとも、どもるから人と話をせすにひっそり暮らすなど、生活全般への影響具合でみるべきか、議論が分かれています。

国立京都国際会館で開かれる。これまでに、外国からは八カ国約三十人、国内からは約百七十人の参加申し込みが届いている。

「二エンカウンター・トレーニング」という、初対面でも人間関係を結びやすいようにする訓練を、九大助教授（臨床心理学）の村山正樹さんの指導で受ける。参加者の三分間体験発表、外国の研究者による吃音講演なども盛り込まれている。

国際大会といっても、大きな組織があるわけではなく、すべて手づくり、手弁当。その点、準備途中から京都、大阪の学校などで「ことばの教室」を受け持っている先生たちの集まり、

言友会ができたのは二十年前。当初は、どもる群を治せようと集まった。しかし、治らない。自己嫌悪、自己不信が強まった。そのすえに行きついたのが「治すことにこだわり続ける」か「どもる群を持った自分を認めて生きていく」かの選択。発足十年目に出した「宣言一は、どもる群を悪いとしたり、恥とする後ろ向きな生活への決別だった。いま、東京、京都、大阪など二十五の言友会があり、全国言友会連絡協議会（会長・伊藤伸二さん、約千〇



大阪が近づき、資料の準備などに追われる言友会の人たち

大阪市福島区福島で

参加者がなごやかに話し合えるようにするため、初日の冒頭

京都言語障害研究会、大阪言語

大会への参加申し込み、問い合わせは〒550-8303 大阪市福島区福島一ノ六ノ四、カレール店「ターゲット」方伊藤伸二さん（電話〇六―四四八―六〇六一）午後三―八時）へ。